

獣医師生涯研修事業のページ

このページは、Q & A形式による学習コーナーで、小動物編、産業動物編、公衆衛生編のうち1編を毎月掲載しています。なお、本ページの企画に関するご意見やご希望等がありましたら、本会「獣医師生涯研修事業運営委員会」事務局（TEL：03-3475-1601）までご連絡ください。

Q & A 公衆衛生編

近年のペット飼育者の増加に伴い、臨床獣医師のみならず、公衆衛生獣医師もまた、人獣共通感染症に関する正しい知識が求められています。そこで今回は、特に犬と猫を原因とする人獣共通感染症について、基本的な知識を復習します。

質問1：狂犬病に関するa～cの記述のうち、正しいものには○、間違っているものには×を付けてください。

- 犬や野生動物からのみ感染し、人一人感染はこれまで報告されていない。
- 発症すると致死率はほとんど100%である。
- わが国にはこれまで輸入事例を除き、国内感染事例は発生していない。

質問2：ブルセラ症に関するa～cの記述のうち、正しいものには○、間違っているものには×を付けてください。

- Brucella* は、好氣的培養により比較的容易に分離でき、24時間以内にコロニーを形成する。
- 犬では尿中に排菌され、排泄物による環境汚染には充分留意する必要がある。
- わが国にはこれまで輸入事例を除き、国内感染事例は発生していない。

質問3：猫ひっかき病に関するa～cの記述のうち、正しいものには○、間違っているものには×を付けてください。

- 通常、猫は症状を示さない。
- 病原体の猫間の伝播にはネコノミが関与する。
- わが国にはこれまで輸入事例を除き、国内感染事例は発生していない。

(解答と解説は本誌190頁参照)

解 答 と 解 説

わが国では「動物の愛護及び管理に関する法律」により、人間と動物が共に生きていける社会を目指し、動物の習性をよく知ったうえで適正に飼育・管理するように求められています。このため、動物の飼い主などには、動物の健康と安全を確保するように努めることに加え、動物による感染症（人獣共通感染症）について正しい知識を持ち感染症の予防のために必要な注意を払うことに努めなければならないとされています。一方、動物取扱業者（動物の販売、保管、貸出、訓練、展示を業として行う者）に対しても、都道府県知事等が行う研修会の受講が義務づけられており、この研修会を通して、人獣共通感染症に関する啓発活動が行われています。このため、臨床、及び公衆衛生、両獣医師にとって人獣共通感染症に関する正しい情報を発信する機会は増えています。このような背景から、今回は代表的なペット由来人獣共通感染症について復習します。

質問1に対する解答と解説：

(1) 狂犬病に関する問題

a：×

狂犬病は、狂犬病ウイルスを保有する犬や猫、さらにコウモリを含む野生動物に咬まれたり、ひっかかれたりしてできた傷口を介して感染し、発症します。わが国など一部の国を除き世界各地で発生がありますが、主要な感染源動物は地域によって異なります。すなわち、アジア、アフリカでは犬が原因となることが多く（都市型流行）、北米やヨーロッパではアライグマ、スカンク、キツネ、コウモリ等の野生動物が保有しており（田園型流行）、それぞれ人への感染源となります。人から人への感染は、これまでにタイ、インド、米国などにおいて報告されており、これらは角膜、肝臓、腎臓、及び血管片などの移植により伝播したと考えられています。

b：○

狂犬病は狂犬病ウイルスに感染し、発症してしまうとほぼ100%死に至ることが知られています。しかしながら、感染動物からの受傷後、受傷部の洗浄、曝露後ワクチンの投与、免疫グロブリン投与などの曝露後発病予防処置により発症を阻止することができることも知られています。一方、曝露前にワクチン接種歴がある、または曝露後に発病予防処置をされ、その後、狂犬病を発症してしまったものの、後に回復した事例がわずかに報告されています。2004年、米国・ウィスコンシン州では、15歳の女性が、曝露前後にワクチン接種を受けた経歴がなく、狂犬病を発症したものの、回復したはじめての事例が報告されています。

c：×

戦後の混乱期など、過去には国内でも狂犬病が蔓延していたことが記録されています。これに対し、1950年に制定された狂犬病予防法により、狂犬病対策が強化され、1957年（昭和32年）以降は輸入事例を除き発生がありません。記憶に新しいのは、2006年11月にフィリピンで犬からの咬傷を受け帰国した男性が帰国後に発症した輸入事例があります。

質問2に対する解答と解説：

(2) ブルセラ症に関する問題

a：×

Brucella は、一般に自然材料からの分離培養が困難な細菌です。分離培養には高品質のペプトンを基礎培地とし、血清を添加した培養液で増殖しますが、通常3～10% CO₂分圧下で培養する必要があります。また、増殖速度は遅く、初代分離には4週間もの長い期間を要することがあります。*Brucella* は血液や骨髓から分離され、特に生物型 *Canis* は、しばしば犬の精巣から分離されます。

b：○

犬には、生物型 *Canis* による感染が流行的に見られます。感染犬の多くは無症状ですが、妊娠犬では死産を、雄には生殖器異常をそれぞれ引き起こします。長期間持続感染し、尿中に排菌され、環境を汚染することが問題となります。一方、人では、一定期間の発熱期と微熱（あるいは平熱）を示す時期を交互に繰り返す波状熱といった特徴的な症状を示すことが知られています。

c：×

これまでブルセラ症の国内発生事例は、輸入事例や犬との接触が原因と疑われるものの、*Brucella* が分離されず、犬から人に感染したことが証明された事例はありませんでした。しかし、2008年愛知県の犬飼養施設において犬から飼育者へ感染が広まった事例が報告されています。

質問3に対する解答と解説：

(3) 猫ひっかき病に関する問題

a：○

猫ひっかき病の原因菌は *Bartonella henselae* という細菌です。感染源はその名の通り猫（犬が原因であったと考えられる猫ひっかき病の事例も報告があります。）ですが、その感染猫では一般に全く症状を示しません。一方、通常、人では受傷部位付近のリンパ節腫脹や発熱を引き起こします。一部の免疫不全患者が感染すると、細菌性血管種や細菌性肝臓紫斑病を引き起こすことも知られています。

b：○

B. henselae は感染猫の血管内皮細胞や赤血球内に侵入し、持続感染します。感染した赤血球を含む血液を吸血したネコノミが同菌を保菌し、他の猫に寄生して吸血した際に伝播が成立すると考えられています。さらにネコノミは吸血すると同菌を含んだ糞便を排泄します。猫はグルーミングの際に爪や口腔内に同菌を含んだネコノミの糞便を付着させ、ひっかき傷や咬傷を介して人に感染すると考えられています。

c：×

猫ひっかき病は、現在、感染症法において届出義務の対象ではありませんので、わが国の正確な患者数は明らかとなっていません。医者を対象とした人獣共通感染症に関するアンケートでは、これまでに診断した経験を有

する人獣共通感染症として最も多くの件数が上がっていることから、わが国で最も一般的に認められる人獣共通感染症であると考えられます。一方、感染源となる猫では、わが国の動物病院に来院した猫を対象にした調査で

7.2%の保菌率であることが報告されています。

キーワード：人獣共通感染症，狂犬病，ブルセラ症，
猫ひっかき病

※次号は、小動物編の予定です